

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

68

2011
0822

立秋とは名ばかりの暑い日がつづいておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。ニューズレター都市史研究68号をお届けいたします。

本号では5月にデイヴィッド・アンバラス氏をお招きして開催されたラウンドテーブルの報告と、9月以降の活動予定、出版物紹介を掲載いたします。

節電をはじめ未だ震災の影響を受けている方も多いことと存じますが、今後とも都市史研究会へのご理解とご助力をお願い申し上げます。

ラウンドテーブル「“Bad Youth”と東京の近代——デイヴィッド・アンバラス氏を囲んで——」

2011年5月28日、東京大学建築学会議室において、デイヴィッド・アンバラス氏（ノースカロライナ大学）を囲むラウンドテーブルを開催いたしました。当日はデイヴィッド氏によるご報告に加え、大日方純夫氏（早稲田大学）・藤野裕子氏（早稲田大学）からのコメントがあり、充実した内容となりました。以下に参加記を掲載いたします。

参加記

5月28日、ラウンドテーブル「Bad Youth」と東京の近代—デイヴィッド・アンバラス氏を囲んで」が催され、「Bad Youth: Juvenile Delinquency and the Politics of Everyday Life in Modern Japan” Barkley, Los Angeles and London: University of California Press,2006）の著者デイヴィッド・アンバラス（ノースカロライナ大学）氏を発表者に、大日方純夫（早稲田大学教授）・藤野裕子（早稲田大学助教）両氏をコメンテーターに迎え、同書について様々な視点から議論が交わされた。

アンバラス氏は2006年に上梓した“Bad Youth”の趣旨を、当時の出版物や写真の紹介を織り込みながら2時間近くにわたり発表した。同書は日本の近代化を、青少年の「不良化」が問題化され、彼らの「保護」が様々な矛盾をはらみつつ進行する過程から照射したものである。検討される時期は近世から太平洋戦期にまでおよぶが、特に日清・日露戦争期、両大戦間期、総力戦期が、「不良」構築過程における画期として措定されている。アンバラス氏が維新以降の「不良化」言説・対策の担い手として着目するのは、「国家」「政府」よりも形成されつつあるnew middle class（「新中間層」とは必ずしもぴたりと重ならないという）であり、彼らの価値体系や生活実践に基づいた社会の再編成が目指されるなか、その過程に不可欠なものとして「不良

化」問題の提起があることが強調された。

大日方氏は「“BAD YOUTH”を読む——警察史研究の立場から」と題しコメントを行った。大日方氏は同書に喚起された認識として、警察に（警察的な）社会秩序の創出や都市空間の統御という、既存秩序の維持にとどまらぬ機能を見出し得ることなどを挙げたうえで、若者の犯罪や「非行」に警察がどのように対したかを、具体的な事例一日露戦後の「不良少年」検挙や研究の進展、1920～30年代の娯楽空間における「不良狩り」など一を通じて検討。そのうえで論点として、「不良」の社会的・経済的出自、青年層に占める位置、社会・政治運動との関係などの考究の必要を提起した。

藤野氏は「“Bad Youth”と東京の近代・コメント——近代民衆史の立場から」と題しコメントを行った。藤野氏はまず同書の意義を、構築主義的観点からの「不良少年少女」歴史化を、言説分析・問題解決のための諸実践（監視体制の確立など）の再構成の両者を通じて実現した点、都市・若年男性をめぐる問題の分析にジェンダー・セクシュアリティの視点を導入した点などに求めた。そのうえで近世～近代過渡期の叙述が十分でないこと、分析対象に同時代的な「不良」と著者が抽出した「不良的なもの」とが混在し、一定していないことなどを課題として挙げた。藤野氏は続けて同書の内在的な掘り下げを試み、不良少年団と都市下層労働（いずれも規範への対抗性を帯びた周縁的存在）との関係、ならびに反逆的な「不良少年」団と政治運動との関係の検討を、とり得るアプローチとして提示した。

続いて質疑応答。コメンテーターの問題提起と参加者の質問とにアンバラス氏が答えた。アンバラス氏は“Bad Youth”に通底する、日本の近代化の特殊性についての認識として、儒教思想とも関係の深い「一糸乱れぬ」近代化の追求と、その結果成立したobsessive compulsiveな社会という像を示した。また大日方氏・藤野氏などが指摘した「不良」と政治運動との関わりについては、1920年代の文部省が「不良少年」と「左傾化青年」を区別していることを紹介したうえで、彼らの「壮士」的な生活態度はあくまでの学生文化としてのそれであり、high politicsの主体としては捉え難いこと、同書ではhigh politics論とは異なる文脈にあるpolitics of everyday lifeの検討であると述べた。

アンバラス氏の発表、コメント、質疑応答それぞれの段階で、“Bad Youth”への理解を深めるための糸口が示される一方、同書が十全に捉えてはいない（あるいは意識的に捨象している）研究対象や視覚、さらに民衆史の方法論までもが様々提起されて、刺激に満ちた数時間だった。捉え難い事象を前にすると対象を限定することで「確実さ」を得ようとしがちな自分にとっては、社会学的な知見を織り込み、長い射程を視野に収めて立論するアンバラス氏の研究は、その全体の理解を試みること自体不安と隣り合わせの挑戦である。new middle class という巨大な存在は、old middle class とともに自分の中でまだ輪郭がはっきりしないが、いつかこの手で掴みたいという意欲を失って委縮してはならないということを、今回の発表および討論を通じて強く感じた。

池田真歩（東京大学人文社会系研究科）

ワークショップ「シリーズ：伝統都市を比較する 18-19世紀：伝統都市の自治と公共秩序——リールとブリュッセルを事例に」開催のお知らせ

9月18日、東京大学法文1号館219号室にてワークショップを開催いたします。

伝統都市を比較する、日本とフランスの都市史研究交流を、次のステージに向けて進展させるためのワークショップです。今回はリール第三大学のカトリーヌ・ドニさんをお招きして、初秋のひとつを楽しい研究会の機会にしたいと希望します。

日時：2011年9月18日（日）午前9時半～17時

場所：東京大学文学部 法文1号館 219教室

（正門から銀杏並木を安田講堂に歩き、左側二つ目の建物です）

スケジュール：

9時半 ご挨拶

10時～12時 セッション1

報告1「18世紀リールのポリス：フランス絶対王政における公共秩序と都市の自治」

この報告の目的は、概してフランス地方都市においてポリスがどのように組織され機能していたのか明らかにすることにある。その描写に加え、当該時期のフランスのポリスはパリの事例のみに帰着するわけではないことを示したい。とりわけ都市空間のコントロールという点において、この時期にみられる著しい発展についても言及したい。

13時半～15時半 セッション2

報告2「ブリュッセルにおけるポリス変革（1787-1814）：自治とフランスモデル受容の間で」

本報告は報告者の未発表の最新の研究（研究指導資格論文）に基づいている。18世紀、オーストリア領ネーデルラントの首都であったブリュッセルは、1787年以降複雑な状況下に置かれることとなる。つまり、2つの革命、2度に渡るオーストリア支配への回帰、相次ぐフランス軍の侵略である。1794年のフランス軍による二度目の侵略により、ベルギー地域は1814年までフランスに併合されることになった。都市ブリュッセルはこうした一連の事件により著しく変容し、ポリスも相次ぐ再編成を迫られることになった。このような特殊な事例は、動乱期に働くポリスのメカニズムについて考察することを可能にしてくれる。

16時～17時 コメントと質疑

コメント：長井伸仁氏（徳島大学・フランス史）

終了後、懇親会を開催します。

問い合わせ先：trad3@l.u-tokyo.ac.jp

次回都市史研究会例会開催のご案内

2011年10月7日に第74回都市史研究会例会として、初田香成氏（東京大学）の著作を取り上げて書評会を開催いたします。なお、当日は日本建築学会若手奨励特別委員会との共催となります。皆さまふるってご参加ください。

内容 初田香成著『都市の戦後 雑踏のなかの都市計画と建築』（東京大学出版会、2011）書評会

日時 2011年10月7日（金）18時～

場所 東京大学本郷キャンパス 工学部1号館3階315番会議室

評者 高嶋修一氏（青山学院大学）

コメント 青井哲人氏（明治大学）

出版物のご紹介

2010年8月のぐるーぷ・とらっど3と飯田市歴史研究所共催によるラウンドテーブル、「伝統都市の比較史」が別冊都市史研究として山川出版社より刊行されました。出版元ウェブサイトより解説と目次を転載いたします。

高澤紀恵、吉田伸之、フランソワ＝ジョゼフ・ルッジウ、ギョーム・カレ編 別冊都市史研究『伝統都市を比較する——飯田とシャルルヴィル』（山川出版社、2011年）

2010年8月に飯田市で開催したラウンド・テーブルの記録。小規模な伝統都市である城下町飯田とフランスの要塞都市シャルルヴィルを比較類型的に把握。2つの都市を比較した「小規模伝統都市論」と、パリや大坂にも素材を広げた「伝統都市の周縁」の2部構成。

序文 小規模伝統都市——飯田とシャルルヴィル

I 円座「伝統都市の比較史」にむけて

都市を比較する

伝統都市の比較史

II 円座の記録① 小規模伝統都市論——飯田とシャルルヴィル

一八世紀のシャルルヴィル住民

——人口史，家族史，社会史による研究

近世後期飯田町の人口動態と社会構造

シャルルヴィルにおける都市空間の形成と発展

——君侯による創設から鉄道の到来まで

城下町の都市改造と武家地の変化の一断面

——飯田荒町周辺を題材に

III 円座の記録② 伝統都市の周縁

芸術エリアの歴史

人形芝居－芸能の担い手と地域社会

一八世紀前半パリにおけるサント・マルグリット愛徳会と貧民救済

近世後期・大坂における非人の「家」

IV 円座の記録③ コメントと討論要旨

「伝統都市の比較史」コメント①

「伝統都市の比較史」コメント②

討論要旨

V 伝統都市論に寄せて

近世ヨーロッパにおける工業化以前の都市

——イギリスとフランスの事例から考える

飯田とシャルルヴィルを比較する

アウクスブルクにおける再洗礼派の秘密集会

——租税台帳を手がかりに

跋文

(山川出版社ウェブサイトより)

大田原——城下町と宿場町

小松（武部）愛子（とらっど3事務局）

昨年度後期・今年度前期と、栃木県大田原市の郊外にある国際医療福祉大学で、「歴史学」（共通教育）の非常勤講師を勤める機会を得ました。医療・福祉を専門に学ぶ大学のため、高校では理系を選択した学生が多く、日本史を学ぶのは中学生以来という学生が、受講者の半数以上を占めていました。そして、彼らが学校教育の中で歴史学を学ぶのは、おそらくこれが最後の機会となってしまうのでしょう。そこで、この機会にできるだけ歴史学——とりわけ自分が関わった地域の歴史——について関心をもってほしいと思い、授業で扱う素材の1つを大学の立地する大田原としました。ただし、私自身、元々大田原に縁があったわけではなく、非常勤講師として出講したことで初めて接した土地でしたので、授業を通して私も一緒に勉強させてもらうといったような格好でした。

今回、ニューズレターのエッセイに寄稿する機会を得て、関東の北端にある小都市・大田原についてごく簡単に紹介してみたいと思います。

江戸時代の大田原

江戸時代の大田原は外様大名大田原氏（石高1.14万石）の城下町で、町人地部分は奥州街道の宿場町としても機能していました。

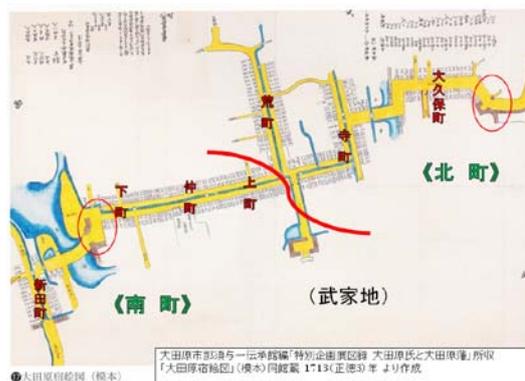
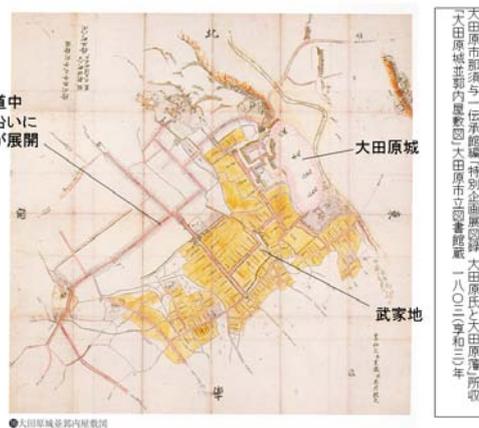
城主大田原氏は、室町時代には那須氏と結んで那須衆（那須七騎）の一翼を担っていましたが、1590（天正18）年の豊臣秀吉による小田原攻めに参陣した功によって、秀吉さらには徳川家康より所領安堵を受け、近世大名という道を歩むこととなります。大田原城は蛇尾川（那珂川支流）に接して立地し、会津の上杉氏、常陸の佐竹氏などに対する防塞の要所として機能しますが、寛永期に奥州道中が整備されたことにより、城の北端の崖を切り通して奥州街道を開通させることになり、その結果、城下町が宿駅としての機能を整えることとなりました。

城下町大田原の規模

江戸時代の大田原城下の規模について、人口から検討してみようと思います。残念ながら城下町全体の正確な人口を知ることは難しいため、断片的な資料から復元してみま

す。まず、武家方は1713（正徳3）年では家中人数539人（うち侍172人）（『大田原市史』）、明治初年の調査では、士族122戸608人、卒60戸149人の計122戸724人（『藩制一覽』）であることがわかります。次に、町方は1804（文化元）年には家数269軒、人数1252人（男605人・女645人）、1849（嘉永2）年では人数1402人（男656人・女746人）となっています（『大田原市史』）。この他に寺社方（12寺）に門前町が若干あるので、以上をあわせると、城下全体では2～3000人程度の規模と推測されます。

大田原の周辺には、大田原氏と同じように那須衆から近世大名となった大関氏の城下町黒羽（1.8万石）、那須衆



から交代寄合（参勤交代をする旗本）となった福原氏の陣屋元村（かつ奥州道中宿場町）である佐久山があり、大田原が当地域で抜群の都市というわけではなく、それと同規模の都市が周辺に点在していたといえます。

町方の構成

町方は、北町（荒町・寺町・大久保町）と南町（新田町・下町・中町・上町）に大きく分けられ、計7町（惣町）で構成されます。宿の入口は枡形、道筋は屈折し見通せないようになっており、ここが単なる宿場町ではなく城下町——軍事都市であることが絵図からわかります。町方の行政は、惣町単位で行われ、町奉行支配のもとで町年寄5人・町名主3～4人が月番でこれを担いました。

1804年の町方全体の生業について、酒造5軒、諸商人71軒、諸職人23軒、旅籠屋42軒（大13軒、中10軒、小19軒）、耕作人77軒、酒食商人32軒であったことがわかります（『大田原市史』所収「宿村大概帳」）。城下7町のうち中町に、本陣（1軒）・脇本陣（2軒うち1軒は上町）・問屋場など宿場町の機能が集中していました。大田原は、宿場町であるがゆえに、街道利用者向けの諸商業が発展しましたが、一方で、都市としての規模が小さいゆえに、街道から少し離れるとすぐに田畑が広がるといった具合でした。これらは「町方百姓地」と呼ばれ、町方全体の約3割にあたる耕作人がここで農業に従事しました。彼らは、農業の他にも、農間渡世として男は近在から米・煙草の買い出しを行い、市売り（町方で六斎市を開催）あるいは振売りを行い、女は名産の那須絹とよばれる為登糸から、「那須緒」と呼ばれる白緒（慶事用の鼻緒）の織り出しを行っていたようです（同上）。

人馬継立をめぐる争論

奥州道中は東北方面の大家の主要な参勤交代路であり、東海道の次ぐ交通量であったといわれています。表は大田原宿の本陣を利用した大家のリスト（1853年）ですが、1年間で14家の大名が宿泊していることがわかります。奥州道中を利用する大名のうち最も石高が大きかったのは仙台藩伊達家で、伊達家の場合、1度の宿泊で本陣利用55人、旅籠利用245人、合計300人規模の大移動となりました。大田原宿を利用した東北大名は、おおむね江戸を出発して4日目に大田原に到着しその晩は宿泊しています。江戸から大田原は約150kmあり、単純に計算して1日平均37.5kmも歩いたこととなります。

宿場町は、宿泊利用だけでなく、次の宿まで荷物を運ぶ人足と馬を用意する（人馬継立）という重要な役目もありました。1792（寛政4）年に大田原宿は、人馬継立をめぐる隣宿鍋掛宿（大田原より北に12.3km）を訴える一件をおこしましたが、この一件は、仙台藩伊達家の初入国にあたって、予定された人馬（346人337疋）を鍋掛宿が用意できなかったことが発端となっています（人見家文書イ115）。人馬を用意できなかった鍋掛宿の間屋場役人は、大田原宿が用意した人馬に対し、見返りに酒代を支払うことを条件に、鍋掛宿の先にある芦野宿（鍋掛より北に8.7km、道中に川越え・峠越えがある悪路）まで荷物を運ぶよう依頼し、急場を凌ぎました。鍋掛宿の間屋場役人は、大田原宿の人馬に対して鍋掛宿問屋場の印鑑をおした白紙を渡し、帰路に鍋掛宿にて白紙と引き替えに酒代を渡す手筈としましたが、その後、芦野宿から戻り酒代を要求した人馬の数が鍋掛宿側の想定よりも多く、用意した金額に足りなかったため、大田原宿側の人馬と折り合いがつかず、

争論にまで発展することとなりました。大田原宿の人馬が、鍋掛宿で荷物を下ろさずにそのまま次の芦野宿まで荷物を運ぶことは「付通し」とよばれ、本来は禁止事項であったので、大田原宿側はこの点を主張することで、道中奉行への公訴を有利に展開できると考えたのだと思います。

一方、鍋掛宿は当日、人馬を用意できなかった理由として、農繁期にあたり助郷人馬（黒羽藩からの拝借人馬、頼人馬）が不

	大田原着	大名	行き先	本陣宿泊 人 馬	旅籠宿泊 人 馬	備考		
1	2月23日	松前氏	江戸→松前	39	3	85		
2	3月19日	丹羽氏	二本松→江戸	36	不明	不明		
3	3月26日	伊達氏	仙台→江戸	55	34	245	114	
4	3月29日	上杉氏	米沢新田→江戸	12	不明	不明	不明	
5	4月3日	戸沢氏	新庄→江戸	20	不明	136	不明	
	4月1日	南部氏	江戸→八戸	(小休)				
	4月30日	田村氏	江戸→二ノ関	(小休)				
6	4月30日	上杉氏	江戸→米沢	32	不明(27軒)			
7	5月17日	板倉氏	福島→江戸	29	不明	36		
8	5月19日	立花氏	江戸→下手渡	20	不明	19	初入国	
9	5月22日	酒井氏	鶴岡→江戸	12	不明			
10	5月23日	阿部氏	白河→江戸	30	不明	111		
11	7月7日	酒井氏	江戸→松山	21	不明(8軒)			
12	8月19日	織田氏	江戸→天童	23	不明	42		
13	10月2日	伊達氏	江戸→仙台	40	不明	278	244	急下向
14	10月15日	生駒氏	江戸→矢島	35	不明	38(3軒)		

【表】 嘉永6(1853)年に大田原宿・本陣を利用した大名（鍋掛1987より作成）

足したこと、前日のうちに継立すべき荷物の到着が夜八時（深夜2時）まで遅れ、それを当日朝にかけて荷物の継送りを行ったために人馬が出払ってしまい、鍋掛宿には人馬が不在であったと弁明しています。大名家の通行はあらかじめ「先触」が出された上での通行となるため、宿場町の都合で日取りを遅らせることはできず、決められた日時に人馬を揃え、次の宿へ荷物を引き渡すことが必須でした。そのような背景を知ると、鍋掛宿が人馬を揃えることができず、大田原宿の人馬に付通しをお願いするに至ったこともやむを得ないことと思えてなりません。

現在の大田原へのアクセス

江戸時代の大田原は奥州道中の宿場町として交通の要所として機能しましたが、現在の大田原は、鉄道・主要道路（東北自動車道・国道4号）ともに市内を通っておらず、東京と東北を結ぶ交通網に直接組み込まれてはいません。鉄道ならば最寄り駅はJR東北本線西那須野駅で、駅から南東に約5km、車で15分程度のところに大田原市街はあり、駅からは本数が少ないながらも大田原市営バス・東野交通バスが運行されています。東京から最速で行くならば、東北新幹線を利用し那須塩原駅下車、駅から南に約9kmの道のりをタクシーで行けば、1時間30分程度で到着できます。

大田原に鉄道・主要道路が貫通しなかった背景には、明治期の那須野が原の開発、これと連動する三島通庸による陸羽街道（現：国道4号）・塩原新道（現：国道400号）の整備、日本鉄道会社による東北本線の敷設があります。陸羽街道は、奥州道中の氏家から白河までの街道筋を採用せず、奥州道中より西側にある那須野が原を通過する新線を開削させています。この新線の開削と東北本線の開通で、大田原は宿場町としての役割を終えることになりました。その後、東北本線に開業した那須駅（現：西那須野駅）と

大田原を結ぶ交通網が整備されるようになり、大田原町側からの出願で那須駅—大田原間に敷設された人車、馬車鉄道（那須軌道：1907～1930）、さらに1918（大正7）年には那須駅から大田原を経由して黒羽までを東野鉄道が蒸気機関車で結ばれました。東野鉄道は1968（昭和43）年に廃線となっていますが、現在でも東野交通バスがこの路線の運行を引き継いでいます。

栃木県域になじみの薄かった私にとって、栃木北部といえば、「那須塩原」と駅名になっている那須や塩原の温泉街の観光地の印象がとても強い地域でしたが、少し視野を東側に広げると、そこには観光化されていない、江戸時代の区画が残る城下町や宿場町を目にできることを知り、大田原まで出講することで得た大きな収穫の1つだったと思います。栃木北部を訪れるさいには温泉も良いですが、ついでにぜひ大田原・黒羽などの城下町、宿場町へも足をのばしてみたいかがでしょうか。

【参考文献】

- ・大塚武松編『藩制一覽』日本史籍協会（1928）
 - ・『日本歴史地名大系 栃木県の地名』平凡社（1988）
 - ・大田原図書館所蔵（マイクロ紙焼版）人見家文書イ115「継立人馬不法取斗出入関係書類」
 - ・鶴巢熊治編『御大名様日記控解説 嘉永6年（1987）
 - ・大田原市史編集委員会編『大田原市史』前編（1975）
 - ・那須文化研究会編『那須の文化誌』随想舎（2006）
 - ・大田原市那須与一伝承館編『大田原氏と大田原藩』（特別企画展、2009）
 - ・那須塩原市那須野が原博物館編『那須塩原・風景の記憶』（2005）
- 当地域の博物館は、国道沿いの道の駅に隣接していることが多いので、車での散策が便利です。